

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成28年 3月15日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 京都大学東南アジア研究所

職 名 所 長

氏 名 河 野 泰 之

助 成 の 種 類	平成27年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 国際会議開催助成			
事 業 内 容	アジアにおける東南アジア研究 2015年 第一回大会 開催			
開 催 期 間	平成27年12月12日 ～ 平成27年12月13日			
開 催 場 所	国立京都国際会館			
参 加 者	総 数 530名	内 訳 ASEAN10カ国と東チモールを含む27カ国からの 発表者・聴衆		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ■ 無 □ 有()			
会 計 報 告	事業に要した経費総額	34,210,314 円		
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円		
	その他の資金の出所	<small>(機関や資金の名称)アジア研究協会、国際交流基金アジアセンター、りそなアジア・オセアニア財団、南洋工科大学、京都大学教育研究振興財団、SEASIA会議参加登録料</small>		
	経 費 の 内 訳 と 助 成 金 の 使 途 に つ い て			
		費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
		旅費交通費(招聘旅費)	16,321,368	1,000,000
		会場・会議費	6,320,332	
		印刷製本費	719,182	
		謝金	1,449,200	
	消耗品費	754,397		
	その他	1,497,708		
	レセプション費	6,148,127		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 本事業の実施につきいただいたご支援に心から感謝申し上げます。			

成果の概要

(1) 会議名

SEASIA 2015 Conference

アジアにおける東南アジア研究 2015 年 第一回大会

(2) 目的

国際会議「アジアにおける東南アジア研究 2015」(SEASIA「シーエイジア」2015)は、アジア・東南アジア研究において世界をリードするタイ、インドネシア、シンガポール、フィリピン、ブルネイ、韓国、台湾の 10 の研究教育機関の連携の下で設立された「アジアにおける東南アジア研究コンソーシアム」による第一回目の国際会議です。京都大学東南アジア研究所は、地域発の東南アジア研究の振興を目的とする趣旨に賛同し、コンソーシアムの主幹機関として、SEASIA2015 の事務局を担当しました。

(3) 内容

- ・開催期間:2015 年 12 月 12 日(土) ～13 日(日)
- ・開催場所:国立京都国際会館 (京都市宝ヶ池)
- ・協力機関:コンソーシアム加盟機関
- ・支援機関:アジア研究協会、国際交流基金アジアセンター、りそなアジア・オセアニア財団、南洋工科大学、京都大学教育研究振興財団
- ・日程詳細:添付プログラム冊子のとおり

国立京都国際会館にて、12 月 12 日に開催された開会式では、山極壽一・京都大学総長、Sunait Chutintaranond・「アジアにおける東南アジア研究コンソーシアム」運営委員会議長がまず挨拶を述べられました。それに続き、基調講演者として、日本とASEANの外交に深く関わってきた福田康夫・元内閣総理大臣、Wang Gungwu・シンガポール国立大学教授、Pasuk Phongpaichit・チュラーロンコーン大学教授の 3 名が登壇し、講演を行いました。いずれの講演にも、参加者は熱心に聴き入っていました。



図1:福田元内閣総理大臣 基調講演



図2:Pasuk Phongpaichit 基調講演

基調講演の他、12日および13日の2日間に渡って開催された会議では、下記6テーマのもと79パネルに分かれ、492名が研究発表を行いました。聴衆を含めた参加者は、ASEAN10カ国と東チモールを含む27カ国からの約530名を数えました。SEASIA2015は、日本で開催されたアジア・東南アジア研究の振興を目的とする国際会議として、これまでで最大級の規模の会合となりました。

1. アジアにおける東南アジア研究
2. 法と政治・地域秩序
3. 環境と社会
4. 開発とその功罪
5. 移動・コネクション・交換
6. 変容と抵抗：東南アジア農村部の変動
7. 歴史と文化への新たなアプローチ



図 3.4: ディスカッションの様子

(4) 参加者 総数 530名 内 外国からの参加者 373名

(5) 会議を実施した効果

12月の京都という時節柄、厳しい寒さを予想していましたが、当日は思いの外暖かい気候に恵まれ、大変な盛況となりました。まだ紅葉が残った日本庭園を望み、国立京都国際会館の格調高い施設において、参加者たちは、東南アジア地域に関わる諸問題について活発に意見交換を行いました。参加者の多くからは、SEASIA2015は、アジアだけでなく、世界的に見ても、東南アジア研究の振興を目的とする会合として最大級の規模の試みであり、非常に有意義な会議であったとの賞賛の声を多くいただきました。

東南アジアは、2015年12月に、「ASEAN 経済共同体」の発足という大きな節目を迎えました。国際会議では、この新しい節目をどう考えるかが参加者の共通関心の一つでした。Wang先生の基調講演や、分科会の一部では、「共同体」の発足後の地域のダイナミズムを問う意見が、それぞれの国と立場から披露されました。同時に他方では、国家や民族の違いを超えて、来たるべき現実をどう考えるのか研究者として真摯な意見交換がみられました。

例えば、今後、地域の統合が進むなかで、自らが属する国民国家の視点から描かれた(既存の)歴史とは別に、新しい時代の東南アジア地域の歴史をどう考え、学校などで教えてゆくのかといった問題が、東南アジアに関わる者の共通の課題であることが確認されました。これらの議論は、「アジアにおける東南アジア研究」の発展を目的として設立された同コンソーシアムのねらいを良く反映した重要な検討課題であるだけでなく、地域の将来を共同で構想するための重要な機会となりました。

今回、国際会議 SEASIA2015 の開催を通じて、東南アジア地域の人々自身が自身にとっての未来を考える場を京都で持つことができたことは、今後様々な形で発展的な効果を生んでゆくものだと思います。同時に、このような形で新しい時代の東南アジア研究の幕開けを徴づけることができたことは、東南アジア研究所の 50 周年記念事業として非常にふさわしいものであったといえます。同会議の開催を通じて、東南アジア研究所が半世紀のあいだに地域内外で築いてきた研究ネットワークがさらに強化されたことは間違いありません。新しい時代の東南アジア研究の幕開けとその足がかりを京都で実現することができたことは、喜ばしい限りです。

今後、国際会議の成果は、SEASIA の公式 Web サイトにて、発表論文をワーキング・ペーパー・シリーズを通じて公表してゆく予定です。またほかに、東南アジア研究所が主管する英文叢書シリーズ『Kyoto CSEAS Series on Asian Studies』などへのテーマ毎の編著としての投稿や、英文学術誌『Southeast Asian Studies』での発表を進めていく予定です。また、同時に、コンソーシアム加盟機関およびそのネットワークに関わる諸機関の出版物への投稿も幅広く促す予定です。